

高齢者のモビリティと余暇活動に関する研究

橋本 成仁¹・厚海 尚哉²

¹正会員 岡山大学大学院准教授 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目1-1)
E-mail:seiji@cc.okayama-u.ac.jp

²学生会員 岡山大学大学院 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目1-1)
E-mail:ev422205@s.okayama-u.ac.jp

本研究では、高齢期の生活の充実において重要となる余暇活動に着目し、モビリティに関する要素が、高齢者の余暇活動への取り組みや満足度とどのように関わっているのかについて検討を行った。分析を行うにあたり、回答者を取り組んでいる余暇活動を元に類型化した結果、「多数型」「外出・交流型」「個人行動型」「消極型」の4つの余暇活動タイプが形成された。使える車を持っている場合や、送迎者してくれる存在がいる場合などでは、「多数型」及び「外出・交流型」の割合が高くなっており、こういった余暇活動タイプの回答者では余暇活動満足度が高いことが示された。また、余暇活動拠点への距離や交通手段に満足であることも、余暇活動満足度を高める要因であることが示された。

Key Words : *elderly people, leisure activity, mobility*

1. はじめに

近年、我が国における平均寿命は延伸を続けており、「平成26年版高齢社会白書」¹⁾によれば、2012年現在の平均寿命は、男性79.94歳、女性86.41歳に達していると報告されている。このことは日本の医療保健水準の高さを示す喜ばしい結果であるが、高齢期が長期化していることも意味しており、就業という拘束が無くなることで訪れる、自由な時間を過ごす期間が長くなっていると捉える事が出来る。そのような状況では、ゆとりある余暇時間をどのように過ごすかということが、高齢者の充実したライフスタイルの形成の上で重要な要件となってくる。具体的には、趣味やスポーツなどといった余暇活動への取り組み方や、そういった余暇活動に対し満足感を得られているかということは、高齢者の生活の充実のための重要な要因になると考えられる。

定年退職後の高齢者の生活は、買物や通院といった、生活を営む上で欠かすことのできない「必須活動」と、趣味やスポーツ、ボランティア活動や他者との交流などの、生活を営む上で必ずしも必要ではない「余暇活動」によって形成されていると考えられる。「必須活動」については、都市計画分野においても、実施に際する移動上の制約等の問題に対し、様々な研究や社会的施策が進んでいる。それに対し「余暇活動」については、生活上不可欠ではなく、かつ必ずしも移動を伴うわけではない

という特性から、都市計画分野における研究、施策といった取り組みはあまり活発ではない。しかし、高齢者の生活の充実に関して重要であり、本来取り組みたい活動の実施のためや活動の幅を広げるためには、モビリティに関する要素も強く関わっていると考えられ、都市計画分野で扱う対象としての重要性があると考えられる。

都市計画分野において余暇活動を扱った既存研究として、椎野ら²⁾は、外出を伴う余暇活動に着目した上で外出タイプの設定を行い、それぞれの外出圏域や外出手段などの空間特性を明らかにしている。田中ら³⁾は、余暇施設として公営プール施設を取り上げ、世代ごとの利用動向の把握を行っている。花岡ら⁴⁾は、余暇施設ごとに利用時意識などを調査し、余暇施設の使われ方を考察している。これらは全て、余暇活動における外出行動パターンや活動時の意識に着目することで、主に余暇活動実態の把握を行ったものである。これまでの既存研究において、モビリティが、余暇活動の取り組み方や余暇活動に対する満足感にどのように関わっているのか、といったことについて考察したものは見られない。

そこで本研究では、高齢者の生活の充実のため重要となる余暇活動に着目し、モビリティが余暇活動への取り組みとどのように関わっているのかについて検討を行う。そのために、必ずしも移動を伴うとは限らないという余暇活動の特性を踏まえた余暇活動種目の分類や、余暇活動種目の分類を元にした個人の余暇活動への取り組みの

タイプ分けを行う。さらに、モビリティも考慮した余暇活動の満足度についての要因分析を行うことで、高齢期の有意義な余暇時間の創出に向けた知見を得ることを目的とする。

2. 調査対象地域とアンケート調査概要

本研究では、高齢者の余暇活動実施状況や余暇活動に対する満足度などの把握を行うため、岡山県倉敷市を対象としたアンケート調査を実施した。調査対象地域を図-1に、アンケート調査概要を表-1に示す。

岡山県倉敷市は、観光地や工業地帯、農村や新興住宅地など、多様な文化を持つ地域により形成されている都市であり、また近年は、「倉敷市高齢者保健福祉計画及び倉敷市介護保険事業計画」⁵⁾が策定されるなど、高齢社会の進展に対する対策にも力が注がれている。

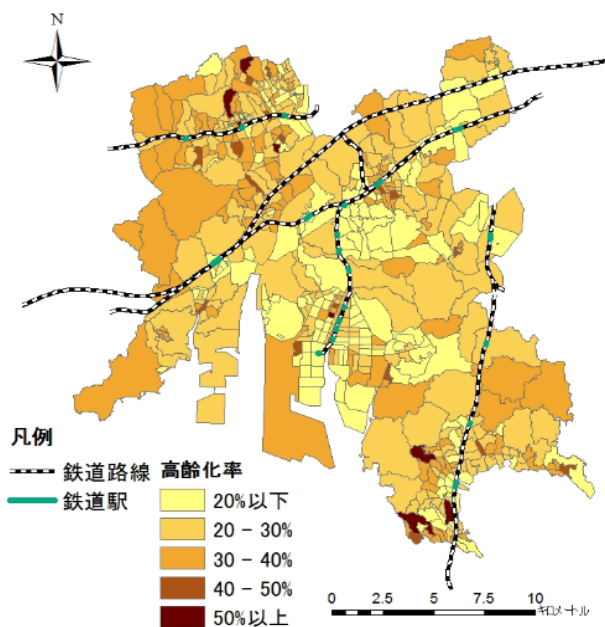


図-1 倉敷市における高齢化率と鉄道路線

表-1 アンケート調査の概要

倉敷市における余暇活動と公共交通を 考えるためのアンケート調査	
調査名	倉敷市における余暇活動と公共交通を 考えるためのアンケート調査
調査対象地域	倉敷市全域
配布・回収方法	55歳以上を対象に無作為抽出、 郵送配布・郵送回収
調査時期	2013年12月
配布票数	3950部
回収票	1706部
回収率	43.2%
主な調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ●個人属性 [年齢、性別、世帯構成など] ●余暇活動状況 [普段取り組んでいる種目 (複数回答)、最も意欲的に取り組んでいる種目 (一つ回答)、頻度、交通手段、満足度など] ●普段の移動状況 [免許・使える車の有無、送迎者の存在、交通手段別利用頻度など] ●バスサービス評価 [バスサービス満足度、最寄りバス停までの距離など]

3. 余暇活動への取り組みの類型化

(1) 余暇活動種目の分類

分析を行うにあたり、まず本章において、普段どのような余暇活動種目に取り組んでいるかによって、個人の余暇活動の取り組みの型を捉え、個人の類型化を行う。前段階として、本節では余暇活動種目の分類を行う。

本研究のアンケート調査では、平成18年社会生活基本調査⁶⁾を参考に35種目の余暇活動種目を提示し、取り組んでいる余暇活動について回答を得ている。余暇活動種目の分類にあたり、移動を伴うとは限らないという余暇活動の特性を踏まえるため、種目ごとに外出が伴う活動であるかどうかを分類の指標とする。具体的には、回答者ごとに1つずつ選択していただいた、「最も意欲的に取り組んでいる余暇活動種目」について、実施時に外出を伴うかについて回答を得ているため、この回答を元に、種目ごとに外出が伴う割合を算出した。また、誰かと同伴で行う活動であるかどうか、余暇活動の種目を分類する上で重要な指標であると考えられるため、回答結果から、種目ごとに誰かと同伴で行う割合も算出した。種目ごとに算出された、実施において外出が伴う割合を外出率、誰かと同伴で行う割合を同伴率とし、これらを従属変数としたクラスター分析によって、余暇活動種目を分類した。作成された余暇活動種目群のクラスターごとに、外出率と同伴率の平均値を比較したものを表-2に示す。外出率、同伴率がともに高い種目群を「同伴外出系活動」、外出率は高いが、同伴率は比較的低い種目群を「個人外出系活動」、外出率、同伴率がともに5割程度の種目群を「外出・在宅系活動」、外出率、同伴率がともに低い種目群を「個人在宅系活動」とした。余暇活動種目群ごとに、どのような種目が含まれているのかをまとめたものを表-3に示す。また、アンケート調査において提示した余暇活動種目の1つである、「遊園地や動物園」への訪問については、クラスター分析に用いる従属変数の算出のために十分な回答を得ることが出来なかったため、今回の種目分類からは省いている。

(2) 取り組んでいる余暇活動による個人の類型化

アンケート調査においては、普段取り組んでいる余暇活動種目として該当するものを、回答者ごとに複数選択で答えていただいている。個人の類型化は、各個人が、普段取り組んでいる余暇活動種目として、前節で示した余暇活動種目群ごとにそれぞれ何個ずつ選択しているかを元にして行う。各個人別に、取り組んでいる余暇活動の選択数を、余暇活動種目群ごとに足し合わせた数を従属変数としたクラスター分析により、個人の類型化を行った。ここで作成された個人の類型を余暇活動タイプとし、以降の分析で用いることとする。余暇活動タイプご

とに、余暇活動種目群のそれぞれの選択数の平均値を比較したものを表-4に示す。全ての種目群において、選択数が比較的多い群を「多彩型」、「同伴外出系活動」の選択数が比較的多い群を「外出・交流型」、「個人外出系活動」、「個人在宅系活動」の選択数が比較的多い群を「個人行動型」、全ての種目群において、選択数が比較的小さい群を「消極型」とした。

(3) 余暇活動タイプの特徴把握

設定した余暇活動タイプについて、それぞれの特徴を把握するために、余暇活動タイプと性別、年齢、余暇活動に取り組む頻度との関係をみたものを、図-2～図-4に示す。まず、余暇活動タイプと性別に関係があるかをみるために独立性の検定を行った結果、余暇活動タイプごとの性別構成には、統計的な差は示されなかった。余暇活動タイプと年齢の関係については、独立性の検定を行

表-2 余暇活動種目群ごとの外出率と同伴率の平均値

余暇活動種目群 クラスター	外出率	同伴率
同伴外出系活動 (N=10)	0.949	0.811
個人外出系活動 (N=10)	0.915	0.420
外出・在宅系活動 (N=6)	0.464	0.539
個人在宅系活動 (N=8)	0.123	0.214

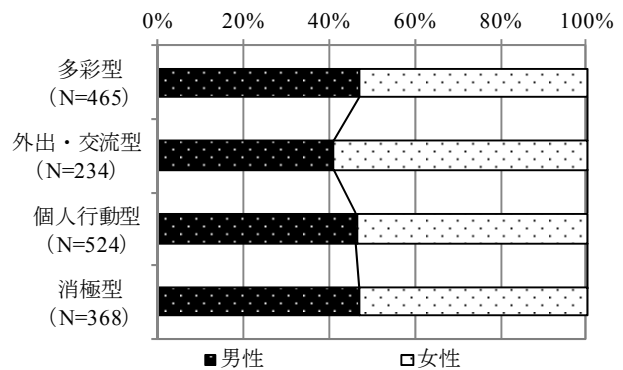
表-3 余暇活動種目の分類結果

同伴外出系活動	個人外出系活動
<ul style="list-style-type: none"> ・ドライブ・ツーリング ・スポーツ (チームや団体に参加して行うもの) ・楽器演奏や音楽 ・絵画・彫刻・工芸 ・舞踊・ダンス ・カラオケやボウリング ・温泉・銭湯 ・福祉センターや老人センター利用 ・外食・会食 ・ボランティア活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ショッピング ・散歩・回遊 ・スポーツ (個人や身内で行うもの) ・ジョギングなど体力作り ・登山や釣りなどレジャー活動 ・写真 ・ギャンブル ・映画やコンサート鑑賞 ・図書館など公共施設利用 ・友人や親類訪問
外出・在宅系活動	個人在宅系活動
<ul style="list-style-type: none"> ・手芸や編み物 ・和歌・俳句 ・書道・華道・茶道 ・囲碁・将棋・麻雀 ・スポーツ観戦 ・孫や子供と遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビやDVD鑑賞 ・読書 ・パソコン・インターネット ・学習 ・趣味としての料理 ・園芸 ・日曜大工 ・テレビゲーム

表-4 余暇活動タイプごとの余暇活動種目群別の平均選択数

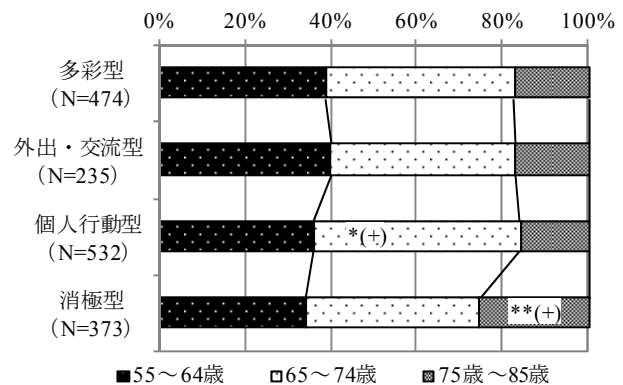
余暇活動タイプ クラスター	同伴外出系 活動	個人外出系 活動	外出・在宅系 活動	個人在宅系 活動
多彩型 (N=497)	2.584	3.817	1.199	3.153
外出・交流型 (N=254)	2.831	1.453	0.535	1.390
個人行動型 (N=555)	0.762	2.332	0.818	1.818
消極型 (N=400)	0.455	0.558	0.313	1.308

った結果、余暇活動タイプごとの年齢構成に、有意水準1%で統計的な差が示された。個人行動型では65～74歳、消極型では75～85歳の割合が高いことが示された。余暇活動タイプと余暇活動に取り組む頻度の関係については、独立性の検定を行った結果、余暇活動タイプごとの余暇活動に取り組む頻度の割合に、有意水準1%で統計的な差が示された。多彩型では週に3～4日、外出・交流型では月に1～3日、個人行動型ではほぼ毎日の割合が高いことが示された。



独立性の検定 P値：0.3816

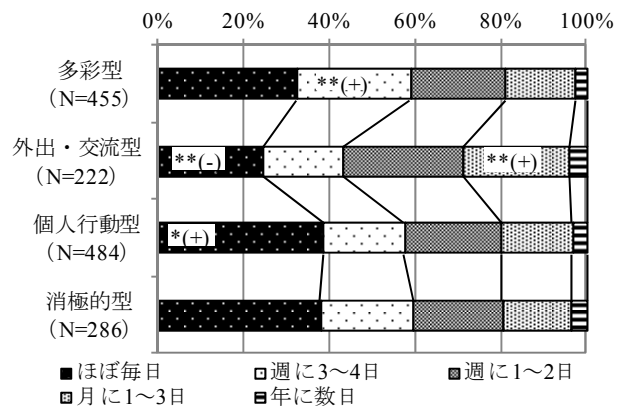
図-2 余暇活動タイプごとの性別構成比



独立性の検定 P値：0.0082 1%有意

クロス集計の残差分析 **1%有意 *5%有意 (+)割合が高い (-)低い

図-3 余暇活動タイプごとの年齢別構成比



独立性の検定 P値：0.0027 1%有意

クロス集計の残差分析 **1%有意 *5%有意 (+)割合が高い (-)低い

図-4 余暇活動タイプと余暇活動に取り組む頻度の関係

4. モビリティと余暇活動の関係

(1) モビリティと余暇活動タイプとの関連把握

本節では、3章で設定した余暇活動タイプに対し、モビリティがどのように関係しているのかを把握する。

まず、余暇活動タイプごとに、余暇活動においてどのような交通手段が利用されているのかを把握するために、余暇活動タイプと、余暇活動を行う際に利用する主な交通手段との関係をみたものを図-5に示す。独立性の検定を行った結果、余暇活動タイプごとの主な交通手段の選択割合には、有意水準1%で統計的な差があることが示

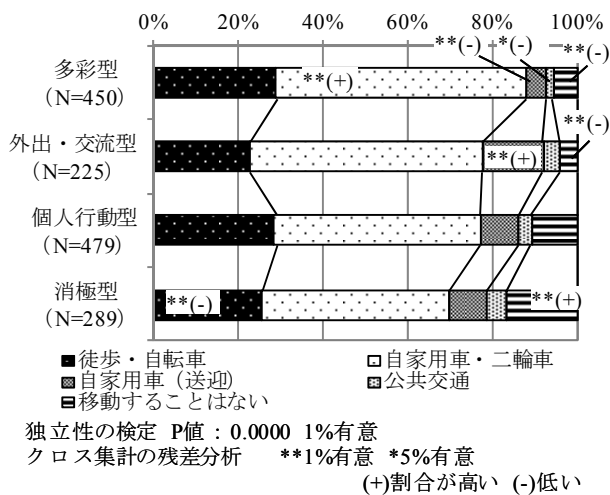


図-5 余暇活動タイプと余暇活動における主な交通手段の関係

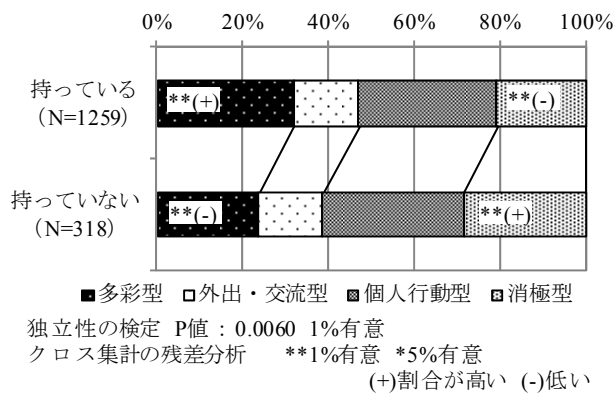


図-6 使える車の有無と余暇活動タイプの関係

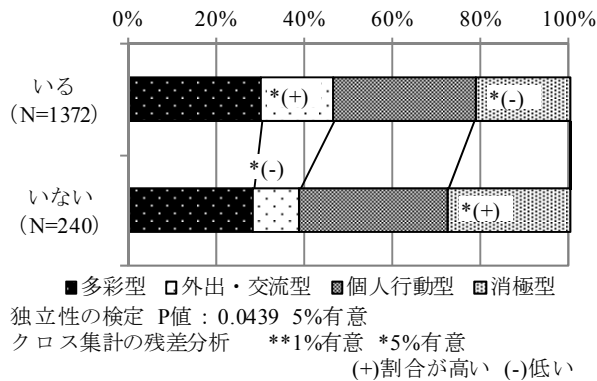


図-7 送迎者の存在と余暇活動タイプの関係

された。多彩型については、自家用車・二輪車の選択割合が高く、自家用車による送迎、公共交通、移動することはないの選択割合が低いことが示された。外出・交流型については、自家用車による送迎の選択割合が高く、移動することはないの選択割合が低いことが示された。消極型については、移動することはないの選択割合が高く、徒歩・自転車の選択割合が低いことが示された。

次に、モビリティに関する、使える車の有無、移動に困った時に助けてくれる送迎者の存在、連続歩行可能距離、総合的なバスサービスレベルに対する満足度といった項目と、余暇活動タイプとの関係をみたものを図-6～図-9に示す。

使える車の有無と余暇活動タイプに関係があるかをみるために、独立性の検定を行った結果、有意水準1%で統計的な差があることが示された。使える車を持っている人では多彩型、持っていなければ消極型の割合が高いことが示された。送迎者の存在と余暇活動タイプについては、独立性の検定の結果、有意水準5%で統計的な差があることが示された。送迎者のいる人では外出・交流型、いない人では消極型の割合が高いことが示された。連続歩行可能距離と余暇活動タイプについては、独立性の検定の結果、有意水準1%で統計的な差があることが示された。連続歩行可能距離が1km以上の人では多彩型、1km以下の人では消極型の割合が高いことが示された。総合的なバスサービスレベル満足度と

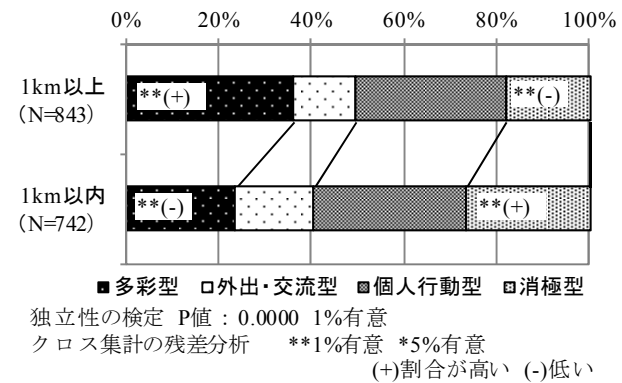


図-8 連続歩行可能距離と余暇活動タイプの関係

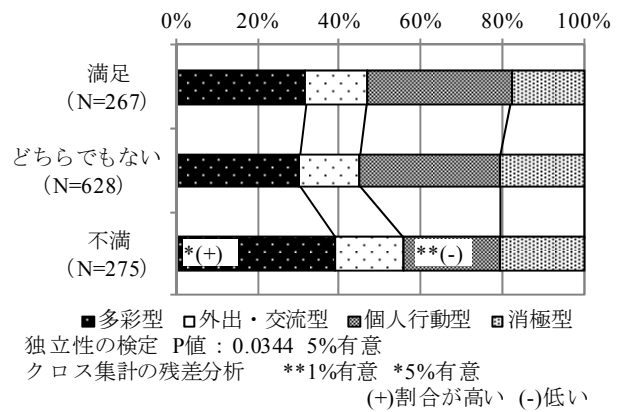


図-9 総合的なバスサービスレベル満足度と余暇活動タイプの関係

余暇活動タイプの関係については、独立性の検定の結果、有意水準5%で統計的な差があることが示された。不満である人では、多彩型の割合が高く、個人行動型の割合が低いことが示された。

(2) モビリティと余暇活動満足度の関連把握

本節では、モビリティと余暇活動満足度についての関連を把握するため、総合的な余暇活動満足度についての要因分析を行う。

まず、モビリティとの関連が示された余暇活動タイプごとの、総合的な余暇活動満足度を比較したものを図-10に示す。余暇活動タイプによって総合的な余暇活動満足度に差があるかをみるために、独立性の検定を行った結果、有意水準1%で統計的な差があることが示された。多彩型と外出・交流型の人では、余暇活動に満足している割合が高く、さらに外出・交流型の人では不満である割合が低いことが示された。また、消極型の人では満足している割合が低く、不満である割合が高いことが示された。

次に、総合的な余暇活動満足度についての関連要因を把握するために、総合的な余暇活動満足度を目的変数として、数量化Ⅱ類を用いた要因分析を行った。分析結果を図-11に示す。説明変数としては、余暇活動タイプの他に、余暇活動に取り組む上で重要であると考えられる、自身の健康、時間的な余裕、経済的な余裕、一緒に活動する仲間のそれぞれに対する満足度、余暇活動を実施する際の移動に関する評価項目である余暇活動拠点への移動満足度、年齢といった項目を用いている。余暇活動拠点への移動については、余暇活動拠点への距離と交通手段についてそれぞれ満足度を尋ねていたが、多重共線性の疑いがあるために設問を統合し、余暇活動拠点への移動満足度として用いている。

分析結果をみると、まず、一緒に活動する仲間の存在と自身の健康満足度のレンジ幅が大きく、余暇活動の満

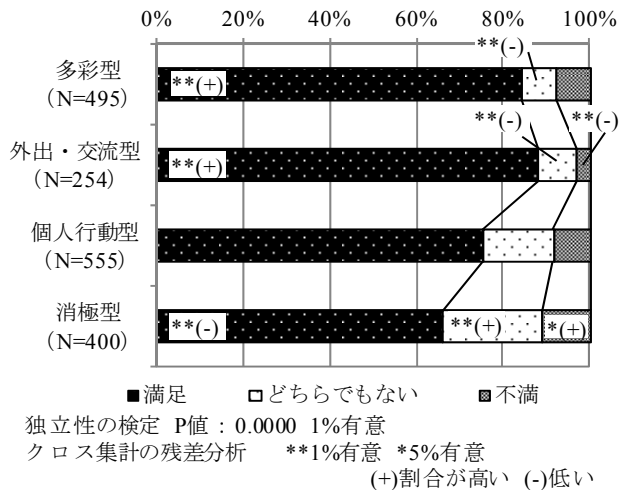


図-10 余暇活動タイプと総合的な余暇活動満足度の関係

足度に対し、強い影響力を持っていることが示された。次いで、余暇活動拠点への移動満足度、余暇活動タイプのレンジ幅が大きい。余暇活動拠点への移動満足度についてみると、距離、交通手段ともに満足であるか、距離に満足であることが、余暇活動の満足度を高める方向へ影響しており、距離、交通手段ともに満足出来ていなければ、余暇活動の満足度を下げる方向へ影響していることが示された。余暇活動タイプについてみると、外出・交流型であることが最も強く余暇活動満足度を高める方向へ影響しており、多彩型であることも余暇活動満足度を高める方向へ影響していることが示された。また、個人行動型、消極型であることは、余暇活動満足度を下げる方向へ影響していることが示された。

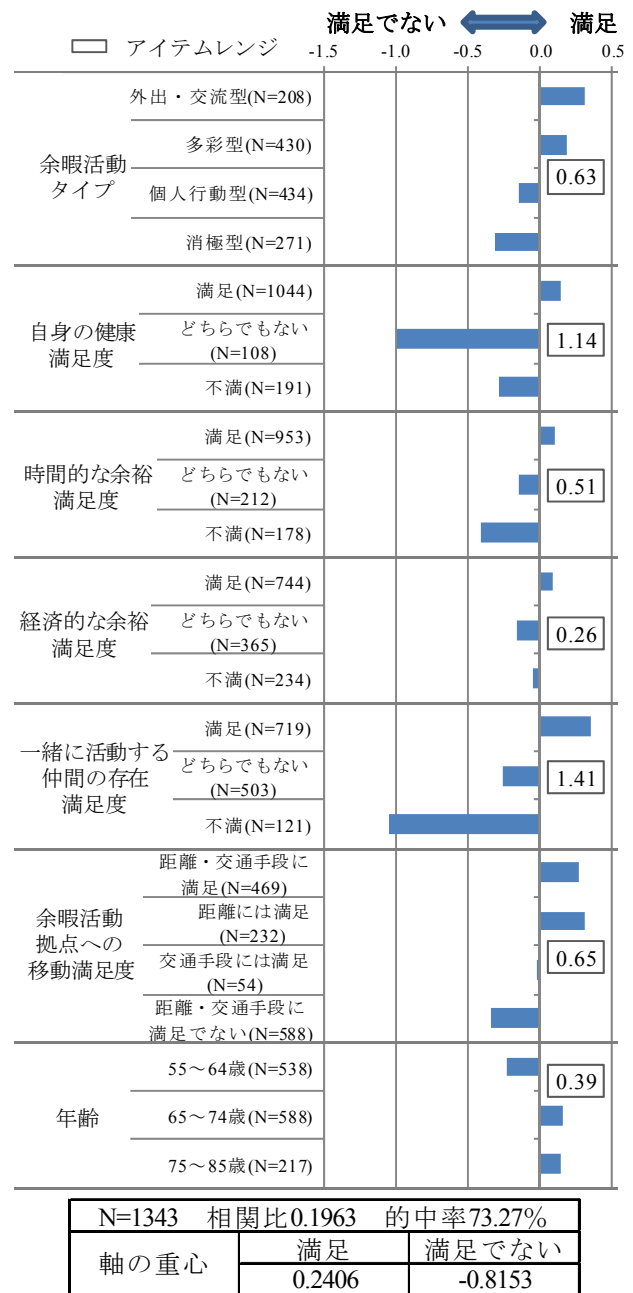


図-11 総合的な余暇活動満足度についての要因分析結果 (数量化Ⅱ類)

5. おわりに

本研究では、高齢者の生活の充実のために重要となる余暇活動に着目し、モビリティが、高齢者の余暇活動への取り組みや満足度へどのように関係しているのかを検討することを目的とした分析を行った。

まず余暇活動の種目を、外出を伴う割合と誰かと同伴で行う割合を元にしたクラスター分析によって分類した結果、「同伴外出系活動」「個人外出系活動」「外出・在宅系活動」「個人在宅系活動」の4つの群が形成された。さらに、個人に対する類型化を行うために、普段取り組んでいる余暇活動として各活動種目群ごとにいくつか選択しているかを元に、クラスター分析によって回答者を分類した。その結果、「多数型」「外出・交流型」「個人行動型」「消極型」の4つの余暇活動タイプが形成された。

モビリティに関する要素と余暇活動タイプとの関係をみた結果、使える車を持っていることと連続歩行可能距離が1km以上であることが、多彩型の割合を高めていた。また、移動に困ったときに送迎してくれる送迎者がいることは、外出・交流型の割合を高めていた。これらのモビリティに関する要素は、外出先へ余暇活動の場を見出し、活動の幅を広げることに関与していると考えられる。

総合的なバスサービス満足度については、不満である人で多彩型の割合が高かった。多彩型の人には、余暇活動における主な交通手段として、自家用車・二輪車の割合が高く、公共交通の割合が低いことから、バスサービスに不満であることが自家用車の所持を促し、結果的に多彩型の割合を高めているというようなことが考えられる。

総合的な余暇活動満足度についての要因分析を行った結果、まず、自身の健康についての満足度や、一緒に活動する仲間の存在についての満足度が、余暇活動満足度に対して強く影響していることが示された。また、余暇活動タイプや、余暇活動拠点への移動についての満足度も、余暇活動満足度に対して影響力を持つことが示された。余暇活動タイプについては、外出・交流型であることが余暇活動満足度を高める方向へ強く影響しており、多彩型であることも余暇活動満足度を高める方向へ影響している。余暇活動の場を在宅に限らず、外出先へ幅広く見出すことや、個人での活動に限らず、誰かと一緒に活動に取り組む機会を持つことが、余暇活動に満足感を見出すために重要になることが考えられる。余暇活動拠点への移動満足度についてみると、拠点までの距離、交通手段ともに満足であること、もしくは距離には満足であることが、余暇活動満足度を高める方向へ影響しており、距離、交通手段ともに満足でなければ、余暇活動満

足を下げる方向へ影響している。余暇活動拠点への移動については、特に距離について満足出来ることが、余暇活動満足度を高める上で重要となり、余暇活動満足度を下げないためには、交通手段に対して満足であることも重要になることが把握された。今回の分析を通して、モビリティは、余暇活動への取り組みへ影響することで余暇活動満足度に関係していること、また活動拠点への移動満足度という形で余暇活動満足度に関係していることが明らかとなった。

なお、本研究では、分析に際して、余暇活動には移動を伴う場合と伴わない場合があるという特性があることを踏まえて、活動種目の分類を行っている。しかし、余暇活動の特性として、年齢や性別、個人の趣向により行っている活動が大きく異なっているということも考えられる。このような特性を踏まえた活動分類による分析も、余暇活動の充実について検討する上で考慮すべき点であると考えられ、今後の課題としたい。また、余暇活動満足度の関連要因であった、余暇活動拠点への移動についての満足度に関して、具体的に満足できる移動距離や交通手段とは何であるかについての言及には至っていないため、今後はこの点についての詳細な分析も行っていきたい。

謝辞：本研究は科研費（25289204）の助成を受けたものである。また、岡山県倉敷市には、調査に関し多大な協力を頂いた。この場を借り、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 内閣府：平成 26 年版高齢社会白書（全体版），http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf_index.html
- 2) 椎野亜紀夫，中村政，木下勇，齋藤雪彦：高齢者における余暇外出行動の空間特性に関する研究，第 35 回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.829-834，2000.
- 3) 田中直人，荒木兵一郎，足立啓，川西俊久：神戸市における公営プール施設の利用動向—高齢社会に向けての地域余暇施設計画—，第 26 回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.391-396，1991.
- 4) 花岡利幸，大山勲，近藤守：甲府地域の事例に見る地方都市圏住民の屋外における余暇利用施設・場所の使われ方に関する考察，第 30 回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.13-18，1995.
- 5) 倉敷市：倉敷市高齢者保健福祉計画及び倉敷市介護保険事業計画，<http://www.city.kurashiki.okayama.jp/secure/15043/%E5%85%A8%E4%BD%93.pdf>
- 6) 総務省統計局：平成 18 年社会生活基本調査，<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm>

(2014.??受付)